

ふるさと見て歩き 第90回

山方河岸 根本家

道路や鉄道が整備される以前、人の移動や物資輸送は馬や牛といった動物や荷車、舟などに頼っていました。中でも荷物の輸送に大きな役割を果たしたのは、陸上を運ぶよりもはるかに安く、速い舟運でした。

市内を流れる一級河川、那珂川と久慈川は、当地と野州、奥州、江戸などを結ぶ主要な流通路の一つでした。南郷地方（矢祭町、塙町、棚倉町辺り）や保内郷地方（大子町）から産する年貢米やこんにゃく、木材等を運ぶため、各地に河岸が開かれてにぎわいました。

河岸とは人や物を運ぶ舟が拠点とする船着場を指します。舟運の隆盛に伴って、荷の取扱所にとどまらず、それを管理する蔵、船頭や旅人の宿泊する宿屋が作られ、河岸が直接売り買いの場となる市の機能を果たす所も現れました。



▲山方河岸跡

久慈川は八溝山を源流とし、棚倉町や矢祭町、大子町を流れ、里川や山田川、浅川などの支流と合流して、日立市と東海村との境界で久慈浜に注ぐ河川です。久慈川の河岸には、北から棚倉、寺山、塙、下野宮、川山、矢田、大子、久野瀬、頃藤、西金、山方、高渡、上岩瀬がありました。このうち久慈川の上流にあたる頃藤以北の河岸では浅瀬や早瀬が多く、川の中に大石が点在して舟の通行を妨げるため通船は大変難しく、たびたび河川の改修願が流域の村々から出されました。渇水は冬季に限らず日常的に見舞われていたようで、わざわざ雨の後の水量が増した日を選んで大きな荷物を輸送したようです。保内郷の年貢米を運ぶのも困難なため、長倉や野口、小野といった那珂川の河岸まで直接陸送し、水戸城下へ輸送する方法もとられました。

山方宿近くにあった山方河岸は、代々根本孫左衛門が河岸守を務めました。根本家の屋号は「河岸」です。

子孫の根本肇さんによれば、船着場となっていた根本家の下の川岸には護岸のため甕が並べて埋め込まれていて「カメバリ」と呼ばれていたそうです。ここで陸揚げした荷は牛や馬に引かせ、大久保、野上を通過して小野河岸へ運ばれました。根本家は明治時代以降、運送業と共に石材業と木材業も営むようになりましたが、同じように運送業者が兼業する例が多く見られます。



▲かつての河岸蔵



▲「河岸」の屋号

根本家には残念ながら江戸時代の史料はほとんど残っていません。ですが、明治、大正期の帳簿を見ると木材や楮、粉こんにゃく、鉱石などをはじめとして、自転車や家具などの生活雑貨まで運んでいる記録があります。



▲根本運送店の帳簿（大正期）

紙の原料となる楮は江戸時代以来の当地の特産品で、市内地域はもとより、烏山や美濃和紙で有名な岐阜県の業者とも取り引きしていることがわかります。また、中世以来の伝承を持ち、太平洋戦争中に盛んになった金の採掘は、大正期も行われていました。根本家の帳簿では舟生金山、頃富士（頃藤）金山の金鉱石の運搬に根本家がかかわっていることがわかります。

明治以降、道の整備が進むと、舟運と荷馬車などを使う陸上輸送を並行して行うようになっていきました。そして大正11年に水郡線が山方宿まで到達すると根本家は河岸業を廃業し、運送業をすべて陸上輸送に切り替えました。市内の河岸の多くは鉄道が敷設されることでその役割を終えました。

歴史民俗資料館大宮館 ☎52-1450